

Navigating Coronavirus Disease 2019 Vaccination and Uveitis: Identifying the Rates and Risk of Recurrent Uveitis after Coronavirus Disease Vaccination

Charlotte A Jordan, Stephanie Townend, Natalie Allen, Joanne Sims, Charles N J McGhee, Rachael L Niederer

Ophthalmology. 2023 May;130(5):501-508.

doi: 10.1016/j.ophtha.2022.12.013.

本研究はぶどう膜炎の既往を持つ患者に焦点をあて、新型コロナワクチンウイルス接種後の副反応と思われるぶどう膜炎の発症がどの程度生じるかについて、またそのリスク因子について報告しています。ニュージーランドの眼科三次医療機関であるオークランド地区保健局の疾患データベースから、2010年1月1日から2020年12月31日の間にぶどう膜炎と診断された被験者を抽出し、新型コロナワクチンBNT162b2 (Pfizer/BioNTech) 接種前後 (3ヶ月間) のぶどう膜炎再活性化の割合が調査されました。

対象は3008人4184眼で、合計8474回のワクチン接種が行われました。ぶどう膜炎再活性化率は接種前で1000患者-月あたり12.3であったのに対し、初回接種後20.7、2回目接種後15.0、3回目接種後12.8と特に初回接種後に増加を認めました。また初回接種後、感染性ぶどう膜炎と非感染性ぶどう膜炎の両方で増加 (各154%、169%) が確認されました。

過去のデータベースを用いた研究においても、ぶどう膜炎の既往を有する患者のぶどう膜炎再活性化はワクチン初回接種後1000人あたり1.16、2回目接種後0.31であり、いずれもぶどう膜炎の既往のない被接種者と比較し高率で、特に初回接種後に多い傾向にありました。(Tomkins-Netzer O, et al. Ophthalmology. 2022) また本研究の結果が示すように、ワクチン接種後にヘルペスをはじめとする感染性ぶどう膜炎の発症・再活性化の報告などが近年増加していますが、結論にはさらなる研究が期待されます。さらに本試験ではぶどう膜炎再活性化のリスクとして、短いぶどう膜炎の炎症休止期間、慢性経過例、再発歴、ワクチン初回接種が同定されています。

本試験の結果を踏まえ、ぶどう膜炎診療において新型コロナワクチン接種後のぶどう膜炎増悪のリスクについては感染性・非感染性問わずあらゆる病型で検討されるべきであり、また難治例や重症例、再発を繰り返す例などで特に初回接種時に慎重に考慮されるべきであろうと考えられます。

(文責：神戸大学 松宮 亘)